直言

流動的な人材交流と相互応援体制の強化がグループ全体の医療の質向上に大きく寄与

最大限スケールメリット生かし地域医療を堅持



医療法人徳洲会 専務理事
共愛会病院（北海道）院長
太田 智之（おおた ともゆき）

私が札幌東徳洲会病院から当院に院長として着任し、早いもので1年が経過しました。道南の中核として地域医療を支えるこの地で過ごした1年は、地域に深く根ざした医療の尊さと、新たな可能性を肌で実感できた極めて濃密で躍動感に満ちた時間となりました。

現在、函館市は北海道第3の都市でありながら、人口減少と超高齢化が急速に進み、さらには市内の準公的病院が閉院するなど、地域医療を取り巻く環境は大きな激変のさなかにあります。しかし、そうした厳しい情勢下にあっても、当院は対前年比で病床稼働率・救急受け入れ数ともに着実な伸びを見せています。この困難な環境の中で、確かな成果を上げているのは、日々奮闘する職員一人ひとりの絶え間ない努力と、“生命だけは平等だ”の徳洲会グループの理念が病院全体に深く浸透し、全員が同じ方向を向き日々の診療に臨んでいるからにほかなりません。

広大な北海道で急性期から療養へ移行できる一貫体制は稀有な存在

当院は、函館地区での月5回の救急輪番日に、多い時で1日50台近くの救急車を受け入れる高い急性期対応力を有する一方、地域包括ケア病棟や療養病棟をあわせ持つ「ケアミックス病院」です。広大な北海道で、激しい急性期救急を引き受けながら、亜急性期のリハビリから長期療養までを一貫して完結できる体制がある病院は稀有な存在です。

急性期治療を終えた患者さんが、住み慣れた環境のままスムーズに療養へ移行できるこのシームレスな医療体制こそ、当院が誇る独自の強みであり、地域社会に貢献する最大の基盤となっています。

少ない常勤医師で、この過酷な救急輪番と高度なケアミックス体制を維持できているのは、何よりグループの全国の仲間による温かい応援体制のおかげです。

多忙な業務の中、遠路はるばる函館まで足を運んでくださる医師をはじめとする多職種の皆様、そして、それを温かく送り出してくださる全国の病院の皆様に、心より深くお礼申し上げます。この強力な相互支援体制こそが徳洲会の真骨頂であり、「生命だけは平等だ」の理念が全国で力強く息づいている証しにほかなりません。

私自身、元々は大学の医局人事によって徳洲会グループに入職しましたが、今回の札幌から函館への人事は大学とは無関係に行われたものであり、当初は大学同門の教授も驚かれていました。しかし最後には、私の決断を理解し温かく送り出していただきました。旧来の枠組みにとらわれない、こうした柔軟でフレキシブルな人事のあり方こそ、変化の激しい現代で、グループが持続的に発展していくために不可欠な要素であると確信しています。

徳洲会グループには全国で実に4万7,000人余りの職員が在籍しています。この巨大なスケールメリットを最大限に生かした「流動的な人材交流」と「相互応援体制」の強化こそ、グループ全体の医療の質向上と、持続可能な地域医療の確立に向けた大きな武器となります。都市部の超急性期病院と地方のケアミックス病院との間で医師や多職種が日常的に交流し、多様な臨床現場や地域ニーズを経験することは、医療人としての視野を広げ、能力やモチベーションを高める絶好の機会です。さらに、特定病院への負担集中を分散させ、グループ全体で人材を柔軟に生かせば、組織の結束力と総合力は飛躍的に向上します。現在進められている応援手当や処遇制度の見直しも、こうした現場を越えた人材交流を一層加速させる強力な後押しとなるはずです。グループ内の仲間が互いに支え合い、高め合う構造をさらに強固に築き上げていくことこそが、さらなる発展の鍵を握っているのです。

やりがいのある優れた環境と温かい地域柄に恵まれた函館

ここ函館は、医療人として、やりがいのある優れた環境と温かい地域柄に恵まれた魅力的な街です。「ケアミックスの現場を体験したい」、「地域医療に貢献したい」という前向きな気持ちで、応援はもちろん転勤や赴任も大歓迎です。グループの人的スケールメリットと結集された絆を胸に、この地で一緒に患者さんの命を守り、質の高い医療を実践していきましょう。全国の仲間の皆さんのお越しを心よりお待ちしております。徳洲会グループのさらなる飛躍と地域医療の未来のために、皆で頑張りましょう。

CRCと臨床試験のあり方を考える会議

一般演題で優秀演題賞を受賞

徳洲会治験・臨床試験部門

第26回CRCと臨床試験のあり方を考える会議2026 in 京都が9月12日から2日間、「伝承と誇りが紡ぐ医療の未来～明日への希望を信じて～」をテーマに開催され、徳洲会治験・臨床試験部門はシンポジウムと一般演題で2演題の口演を行い、一般演題で優秀演題賞を受賞。共催セミナーでも発表し、徳洲会を紹介する特設ブースも出展、PRに努めた。



「CRCと臨床試験のあり方を考える会議」に参加し研鑽を積んだ徳洲会CRC（左から2人目が溝田部門長）



鶴留CRC（左）は優秀演題賞を受賞

同会議は質の高い臨床試験・研究の実施に向けて臨床試験支援財団が主催している学術集会。

シンポジウムには八尾徳洲会総合病院（大阪府）の元田健太郎・治験センター長が登壇。「徳洲会が挑む治験DX：3つの生成AIシステムがもたらす現場変革と次世代CRCの役割」と題して、現場の負担軽減と品質向上を両立するため徳洲会が実装を進めている①Smart Protocol、②逸脱防止サポートシステム、③新版e-カルテ®生成AI汎用ツール――という3つのシステムを紹介した。

元田センター長は、AI（人工知能）とCRC（治験コーディネーター）が担う業務内容を整理したうえで、AIによって生み出した時間の活用法として、CRCにしかできない業務を行うのが“次世代のCRC”であると展望。「AIを知り、これからの『CRCのあり方』を一緒に考えていきましょう」と呼びかけた。

一般演題では、福岡徳洲会病院の鶴留明里・臨床試験センターCRCが「生成AIを用いたSAE報告書下書き作成の実用性検証」をテーマに口演。SAE報告書とは、重篤な有害事象に関する報告書を指す。同演題は優秀演題賞を受賞した。

発表では、電子カルテ搭載のサマリ（要約）生成用AIによるSAE報告書下書き案作成に関して、実用性を検証し結果を報告。正確さや作業時間を評価し、「情報の取捨選択や医学的判断には課題がある一方、情報収集を補完し、骨子を短時間で整理する補助ツールとして有効です」と総括。精度向上に向け検証を継続する方針を示した。

共催セミナーでは、一般社団法人徳洲会の溝田忍・治験・臨床試験部門長が「Single IRB導入後に求められる治験事務局の再構築」をテーマに発表。Single IRB（治験審査委員会）とは、複数の医療機関が同一の臨床試験や治験を行う場合に、個別の審査ではなく、ひとつのIRBに審査を一本化することを指す。審査の迅速化を目的に、国が制度化を進めているホットな話題だ。

溝田部門長は徳洲会グループIRBの承認プロセスや、Single IRB制度化への対応状況など説明。そのうえで、徳洲会はすでに共同IRBの運営などにより、窓口の一元化や横断的な連携体制を構築していることから、「徳洲会グループの強みを最大限に生かしながら、治験開始までのプロセスを再構築し、症例登録開始までの期間短縮を確実に進めていきたいと考えています」とまとめた。

誰もが安心できる医療・看護を

中部徳洲会病院が地域連携懇親会

中部徳洲会病院（沖縄県）は9月18日、第2回地域連携懇親会を開催した。当日は地域の医療機関や介護施設などの関係者260人超が出席し、交流を深めた。山本芳樹・膠原病内科部長の司会の下、冒頭、大城吉則院長と伊波潔総長（医療法人徳洲会専務理事）が挨拶に立ち、日頃の連携に感謝を伝えた。



日頃の連携への感謝を伝える大城院長

来賓として中部地区医師会の今井千春会長が挨拶した後、診療科紹介では5月に開設した、腹部総合ヘルニアセンターの井谷史嗣センター長が登壇。日本ヘルニア学会監事を務め、鼠径部ヘルニア診療ガイドライン作成などにも携わってきた経歴を紹介した後、内視鏡を用いた低侵襲手術や再発・難治性症例への対応、今後のロボット支援手術導入、地域連携による診療水準向上への意気込みを語った。



「地域連携による診療水準向上を目指す」と井谷センター長

続いて比嘉孝則・北中城村村長による乾杯の音頭で歓談に移り、参加者らは活発に意見交換。最後は呉屋真人副院長が閉会の挨拶を行い、盛況のうちに幕を閉じた。同院は今後も地域の医療機関との絆を強め、誰もが安心できる医療・看護の提供に努める。